矢作川の流れ・洪水・水運についての補足説明

［引用文献・・六ッ美村誌、六ッ美風土記、私達のふるさと中之郷、ふるさと六ッ美西部　他］

1．川の流れの変化

2　洪水

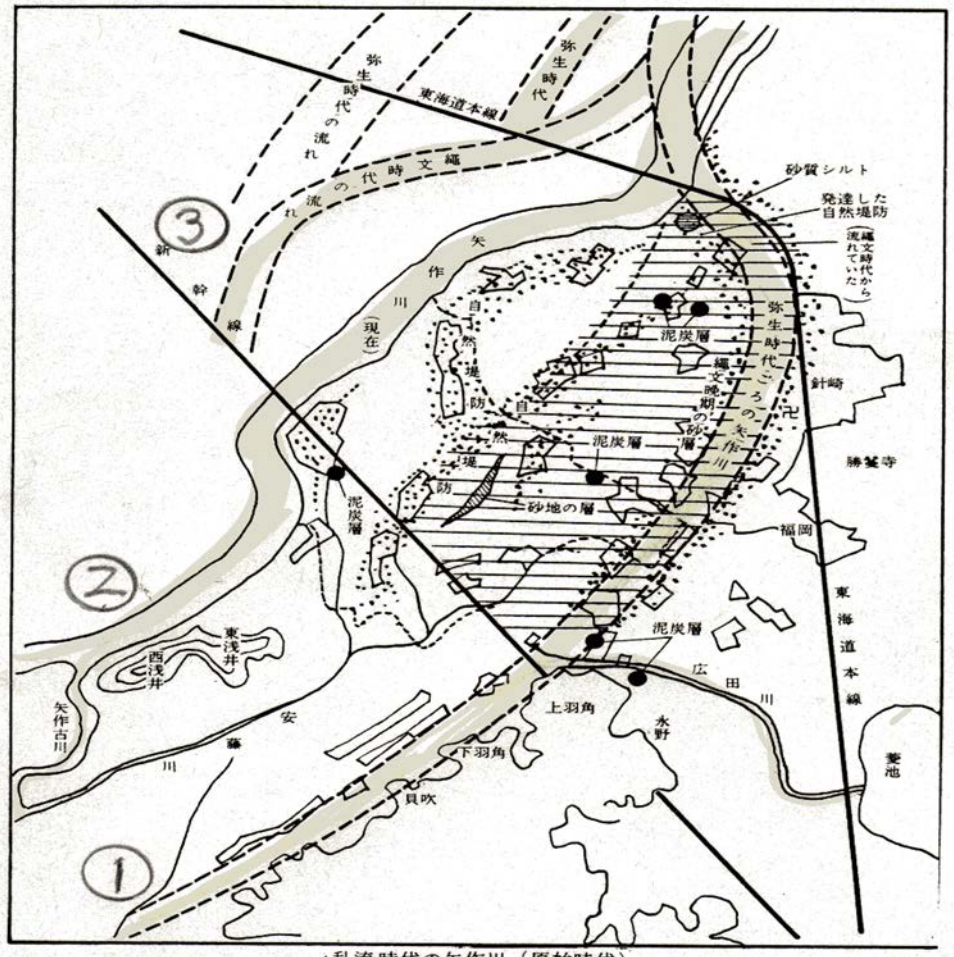
3．　水運と土場

1. 矢作川の流れ

1.六ッ美地区、安城地区は、矢作川によって運ばれた大量の土砂の堆積地域
2. 土砂の堆積により、自然堤防的な高台(沖積平野)ができたが、川の流れは一定せず乱流的に流れていた
3.古代～弥生時代には、矢作川の本流は、六ッ美地区の東側と伝わる
4.中世までは、現在の本流的な矢作川は存在せず、安城地区との往来は比較的容易であった
5.1399年に「六名堤」が築堤されて以来、本流は現在の矢作川となる
6.1605年に「矢作新川」が開削され、ほぼ現在の河道となる

古代～弥生時代の矢作川の流れ

六ッ美風土記　六ッ美南部の歴史・文化を紐解く より



乱流時代の矢作川（原始時代）

- ①は弥生時代の矢作川の流れ
  ②は現在の矢作川
  ③は安城地区の縄文、弥生時代の流れ

- 土砂の堆積した自然堤防的な高台、沖積平野に集落が発生
- 湿地地帯では稲作、川原には蘆の群生
- ①③の間は、交流が比較的容易であった
- ①の川は、幸田の菱池の方へ流れた時代もあった

岡崎城近辺の矢作川の流路の固定

古地理調査、ふるさと六ッ美　より

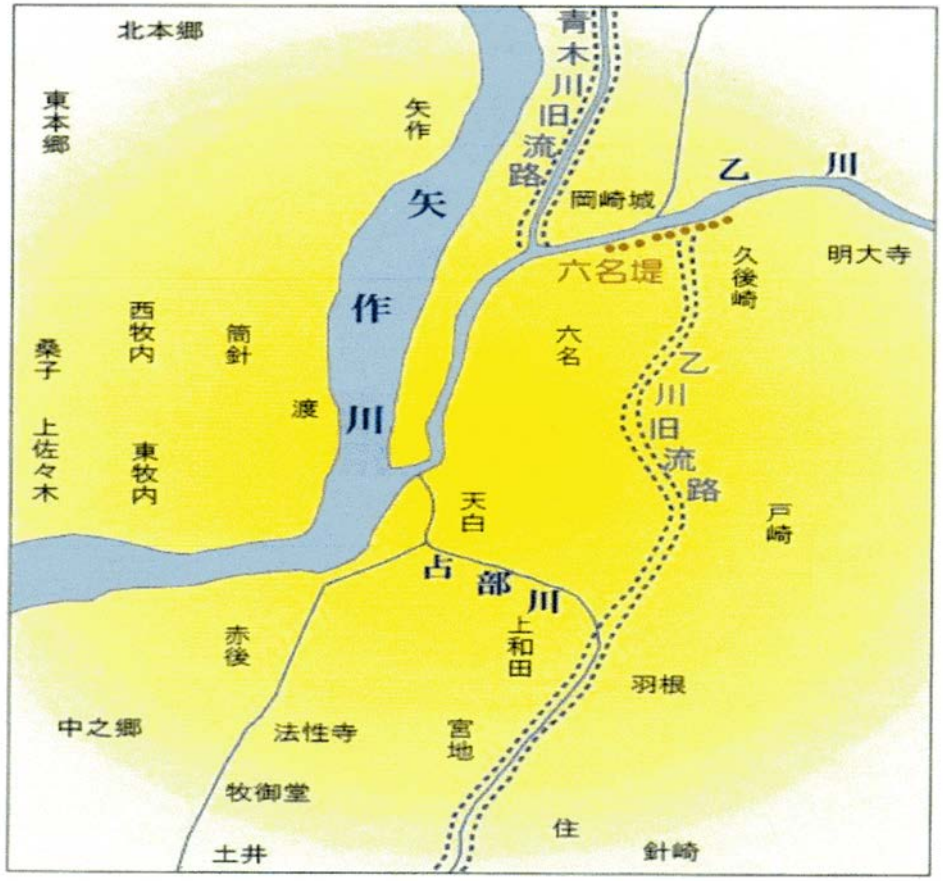


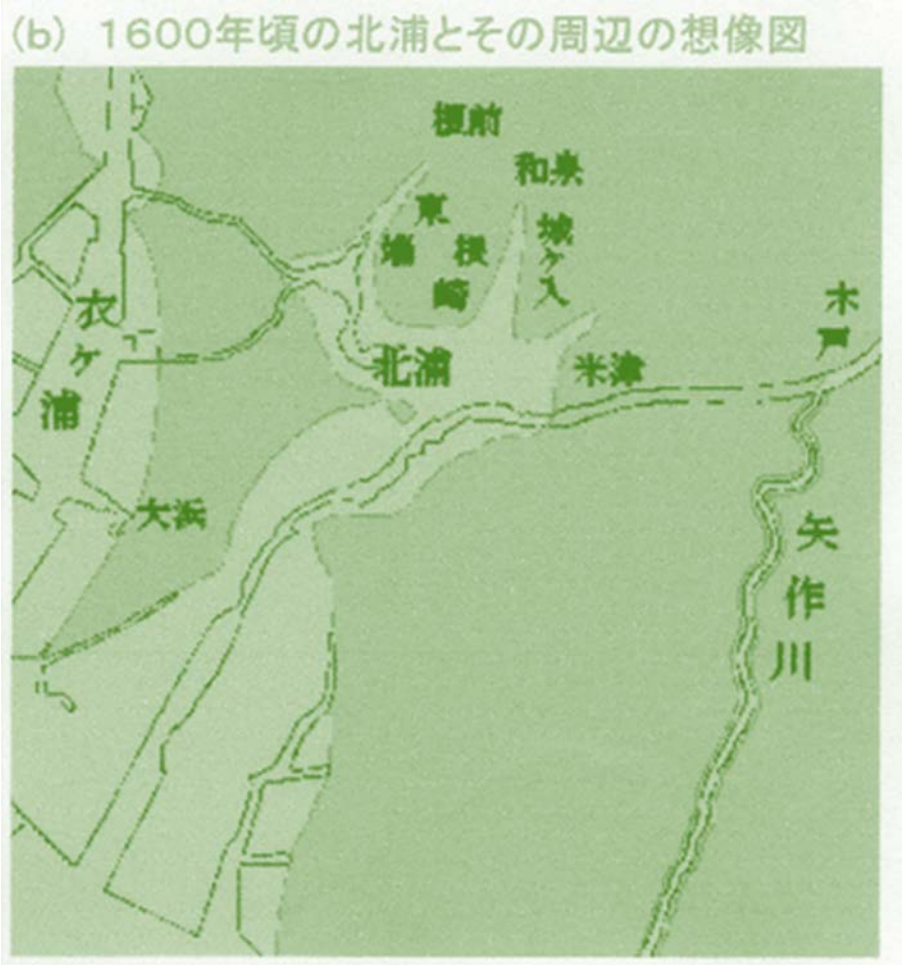
図 3-10　六名堤と乙川旧流路
（『新編　岡崎市史』より作成）

- 1399年に「六名堤」の築堤
  新河道の掘削により乙川の流れも矢作川に注ぐようにした
- 1452 ～55年にかけて、西郷頼嗣が岡崎城の築城に合わせて築堤
- 1590～1600年にかけて、岡崎城主田中吉政によって連続提が築かれた

⇒これらの結果、矢作川中流部の流は、ほぼ固定されたが、築堤技術が十分でなく、しばしば破堤した

矢作新川開削概念図

古地理調査

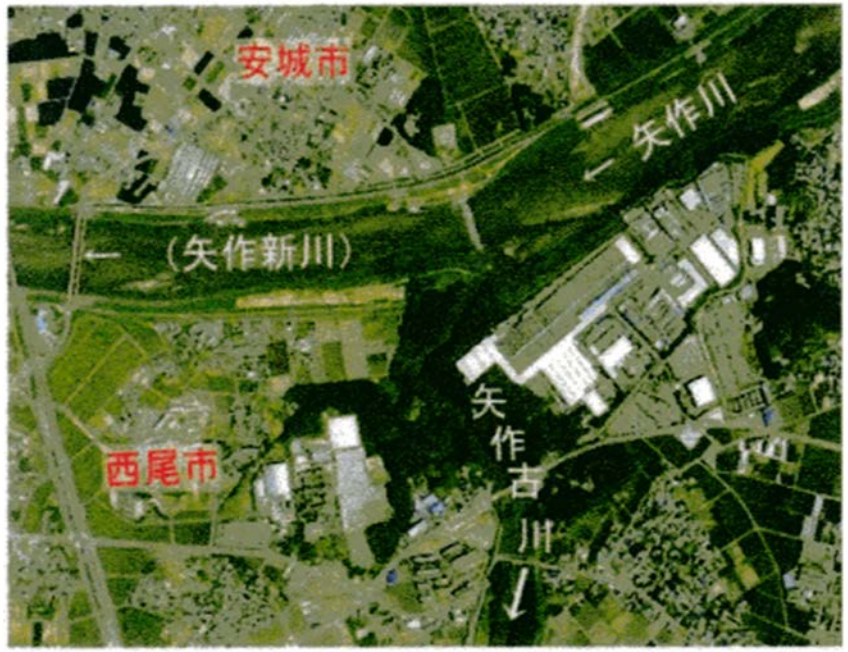


- かつての矢作川本流は、八ッ面山に遮られることで急に流れを転じたため、この部分の流れが悪く、水害が絶えない地域であると共に矢作川の川底へ土砂が堆積し、洪水の原因となった
- 家康は、西尾藩主に新川の開削を命じた
  1603年起工、1605年に竣工
  現在の木戸から米津までの長さ1310m 幅20m、深さ3m程度の新しい堀割りを作り、矢作川の水を西南の入り江に流すようにした
- ところがこの矢作新川の勾配が急であったため、川幅の拡大が進み、流量が増えると共に、大量の土砂を下流に運び、堆積した土砂は砂州状になり、地形をかかえた
  (次ページ 図a)

現在の矢作川・矢作新川の流れ　古地理調査

江戸初期には、現在の油が淵まで入り江であったが、流れ込む大量の土砂により砂州等ができた。堤防・排水路工事等により左図ように流れるようになった

下図は分岐場所の航空写真



２．矢作川の洪水について

- 「六名堤」の築堤、岡崎城の築城に合わせての築堤、新川の開削等により矢作川の流路は一定となったが、江戸時代には洪水、堤防の決裂が頻繁に発生した
- 洪水が頻発したのは、

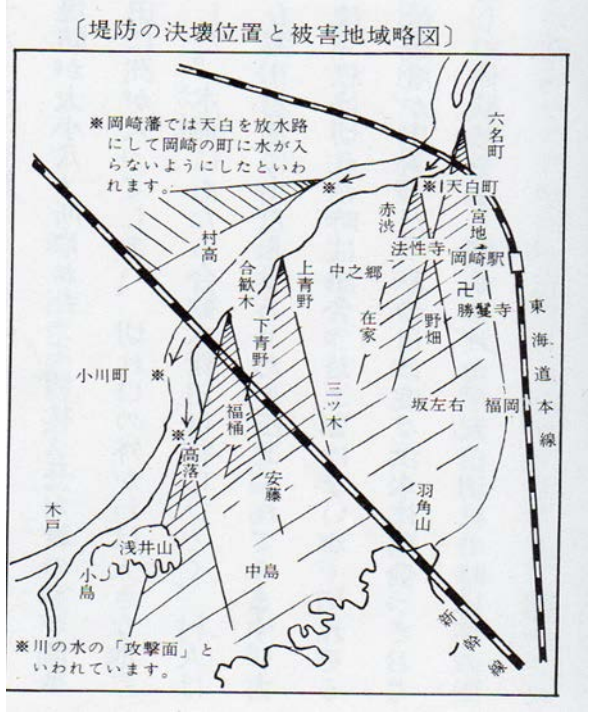
①川底に土砂が堆積し、水はけが悪くなると共に、川床が上がり「天井川」化がますます進行したこと

②堤防をかさ上げする工事も実施したが、堤防に使用した矢作川の土砂が水に対して弱かったこと、また、当時は築堤技術も低く、強固な堤防が作れなかったこと

③「川ざらえ」を幕府に要望したが、幕府役人には聞き入れてもらえなかったこと・・・等々が主な原因

洪水の歴史　[年表に表示されている洪水]

- 慶長の大洪水　（1597年）　・天白堤決裂　（1607年）
- 光和の大洪水　（1615年）
- 上青野で堤決裂　（1646年）・・・来迎院西の堤防切れ、下青野から三ツ木に向かって被害、流路になった区域はすべて砂地となり不毛化
- 矢作川大洪水、堤決裂　（1765年）　・矢作川大洪水　（1767年）
- 矢作川洪水　（1779年）
- 合歓木で堤決裂　（1787年）・・・正願寺西の辺で堤防決裂、付近一面の田は、田土が全部流され砂小石の洲になった、切れの外側は大きな池に、合歓木新田は特に被害大
- 上青野で堤決裂　（1825年」・・・本光寺西付近の堤防が180m程度決裂、面積　約1町の池ができ、　蓮やひしが生えた



- 天白で堤決裂　（1852年）・・・天白地内の「大曲り」の辺で200m以上決裂、天白切れと同時に高落地内の堤防も切れ、矢作川の水は天白から入って高落に出た
  在家・三ツ木等では床上1mまで浸水
- 三島で堤決裂　（1882年）・・・久後埼で、80m程度決裂。下流である六ッ美地区、福岡地区、幸田地区、西尾地区の多くは一面海の如くなり、人、田、家屋等に甚大な被害を与えた

☆その後も、現在まで、台風、豪雨のたびに、矢作川以外での堤防の決壊、道路の破損等がおこり、家屋の全壊、床上浸水、田畑への浸水等の被害が続き、排水路の整備、占部川、広田川等の流路の拡大、堤防の補強工事等が実施されている

［　昭和20年以降の大きな風水害・・・昭和28年　台風（台風の中心が通過）
34年　伊勢湾台風（災害救助法適用）　44年　台風7号　46年　台風23号　］

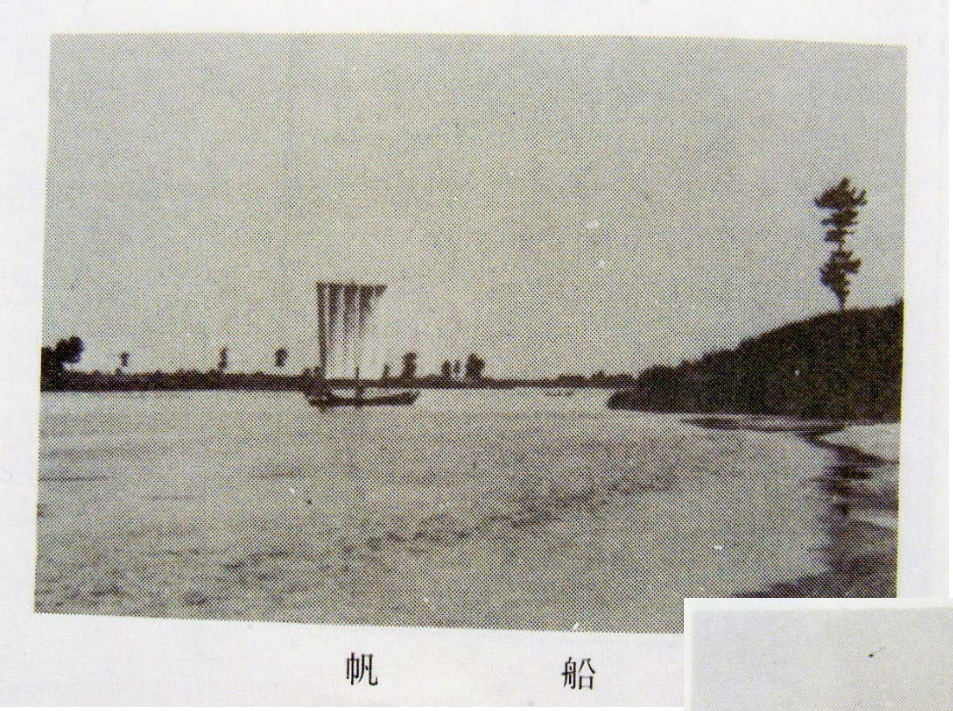
☆宅地化が進み、水田での保水等が減少し、一気に雨水等が流れることも主原因

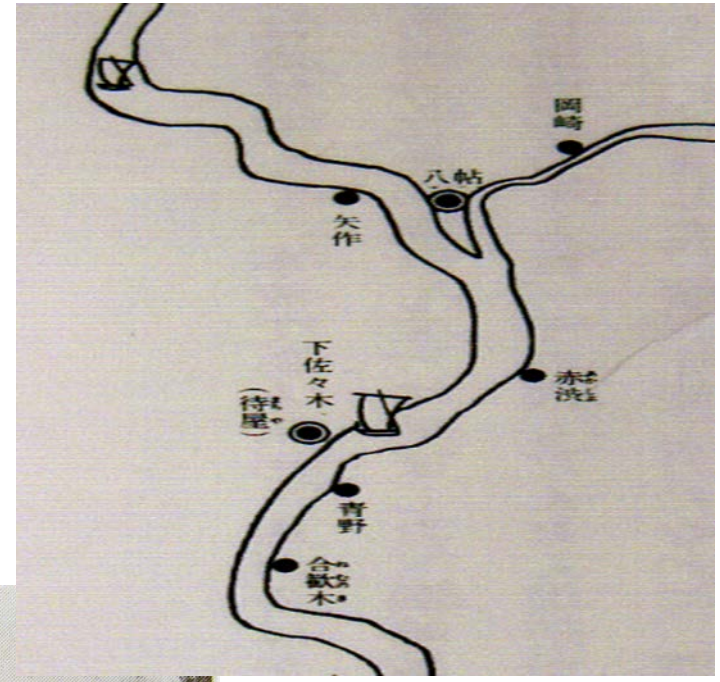
３．矢作川の水運と土場

- 岡崎城が出来てからは、堤防も整備され河口の港と矢作川上流や中流の地点の間を帆船によって往来した
  河口の港からの主な荷物・・塩、魚、綿・綿布、陶器等
  河口の港への主な荷物・・木材、薪、石、天然氷、柿等
- 六ッ美地区には、合歓木、上青野、赤渋等の土場・渡し場があり、上下する帆船が立ち寄った

・この水運は、東海道本線開通後の大正６年頃まで続いた
（中央本線の開通、トラック便の利用、上流に用水やダムができたこと等で水上交通は姿を消した）

帆船・土場の写真　　矢作川の土場の図



帆　　船

昔　の　土　場